

書評

『社会調査のための計量テキスト分析』 ——内容分析の継承と発展を目指して』

樋口耕一 著

(ナカニシヤ出版, 2014年, B5判, 250頁, 3,024円)

佐藤 裕

(富山大学人文学部教授)



本書は、著者樋口耕一氏が開発した「KH Koder」という分析プログラムの設計思想、仕様、そして実際にそれを使用して行われた分析が収められおり、KH Koder とそれを用いた分析をトータルに理解するための本だと位置づけることもできるだろう。そのような受け止め方をしたうえで、私は本書の書評を、「本」あるいは「書かれた研究」の評価としてではなく、分析プログラムである KH Koder の評価という側面を重視して書いてみたい。

KH Koder の設計思想の最大のポイントは、文書やそのなかに現れる言葉をコンピュータによって自動的に収集・分類する方法と、研究者が分類基準を作成する方法を、「接合」させるという考え方であろう。私自身は分類基準の作成（コーディング）は研究者が自分の目で文章を読んで行うべきであり、コンピュータはその作業の効率を増すためにのみ使うべきだと考えているが、そのような立場からみても、著者の「接合」という方針は十分妥当だと思える。本書に収められた調査研究でも、クラスター分析や自己組織化マップといった「自動的」な分析はあくまでも、分析全体のなかでの「最初の段階」と位置づけられており、その結果を参考にしながら研究者自身の問題関心に応じたコーディングを行う分析スタイルが推奨されている。また、自動的に抽出された言葉が原文のなかでどのように使われているのかを簡単に知るための機能が提供されており、これもまた研究者が原文にあたって確認しながらコーディングを行うための助けになるだろう。研究者がすべてに目を通すことができないような大量のテキスト型データを分析しようとするとき、KH Koder は、研究者自身の関心に応じた分析を行うためのきわめて有用なツールになると思う。

KH Koder の設計思想のもう 1 つのポイントは、

分析対象となるテキストデータの階層的な構造化だと私は考える。質問紙調査の自由回答、新聞記事、そして小説までもが同じプログラム、同じ手続きで分析できるのは、KH Koder がテキストデータの「構造」を階層的なものとして抽象化しているからだ。たとえば小説などの長文では、文一段落一節一章といった構造を見出すことができ、新聞記事では、文一段落一記事一日一月一年という階層構造を与えることができる。これらの構造を抽象化し、区別なく扱えることが KH Koder の適用範囲の広さをもたらしているのだが、この点については若干危うさも感じる。つまり、抽象的には同一のものとして扱うことができるということのみが意識され、それぞれの違いが十分に配慮されていないように思えるのだ。KH Koder は質問紙調査の自由回答も小説も分析することができる。それは確かにメリットだが、この 2 つを分析するスタイルには当然違いがあるだろう。その違いについてもう少し考察あるいは説明が必要ではないだろうか。

大規模なサンプルによる質問紙調査が困難になる一方、インターネットの普及などによって大量のテキスト型データは利用しやすくなってきている。ニュースなども初めから電子媒体で利用できるし、ブログや SNS などでも日々発信される言葉を収集することも可能だろう。そういったテキスト型データも「社会」を知るための手がかりとして活用できるはずだ。大量のテキスト型データにただ振り回されるのではなく、研究者が主体的に関わり分析しようとするには、KH Koder は十分に有効なツールとなるだろう。

書評

『実証分析入門』

——データから「因果関係」を読み解く作法——

● 森田 果 著

(日本評論社, 2014 年, A5 判, 344 頁, 3,240 円)

● 橋本 貴 充

(大学入試センター研究開発部助教)



分析なんてわけがわからないよ、でも定量的な分析を強いられているんだ！という人に「一番いいのを頼む」といわれたら、私は本書をお薦めする。

目次をみると「実証分析の落とし穴：こんなの絶対おかしいよ」「サバイバル分析：坊やだからさ」など、学術書らしからぬ、テレビアニメ（アニメに限らないが）などで聞いたフレーズに驚かされるだろう。だが本書の舞台が魔法少女まどか☆マギカや機動戦士ガンダムの世界になっているわけではない（なかには「飛ばねえ豚はただの豚だ」という副題の章で「豚が飛ぶことを選ぶ要因」を例題としていることもあるが）。本書の題材は何と法律！私は失礼ながら、法律は統計学を駆使した定量的な分析と縁遠いものと勝手に思い込んでいた。しかし、著者がいうように「定量的な実証分析は（中略）一般性・客観性に優れるという利点がある。法律は一般的に適用されるものであることに鑑みれば、通常は、一般性・客観性に優れる定量的な（統計的な）実証分析手法の方が、望ましいツールと言えることが多いだろう」ということも道理である。

本書は副題のとおり因果関係の分析についての書籍である。大学の授業では、相関関係があっても因果関係を示したことになることや、因果関係を示すためには実験を行うのが理想的であることを教えられる。しかし、法学や経済学などの文系の学問では、無作為抽出や無作為配置が行えないなど、実験が困難なことが多い。だからといって諦めたらそこで試合終了である。実験が行えない状況で得られたデータからでも因果関係を示すことができるようにと、様々な手法が開発されてきた（文系こそ数理的に凝った分析が必要とは皮肉な話だ）。それらの成果について、どんなことをやっているのか、結果のどこをみればよいのか、

豊富な図表や具体例を用いて明快に記述しているのが本書である。なお、図は多いが、アニメのキャラクターの絵はないので、それは期待しないように。

ただし、本書は分析手法のカタログではない。興味ある章からいきなり読み始めることはお薦めしない。本書の多くの章は、前の章の話に触れつつ、だからこの章ではこんな話をする、という進め方をしている。NHKの朝ドラではないが「地道にコツコツ」第1章から読んでほしい。とはいえ、序盤の章も決して退屈させないので安心されたい。

では、ひととおり読み終わった後で、分析を「やらないか」と思っても、本書だけでは難しいだろう。これは敗北を意味するのか、否！始まりなのだ。詳細を知りたい人のためには文献が紹介されている。本書の手法を実際に試してみたい人のためにはデータやプログラムがWebにアップロードされている。本書は入門書である。入門の先にどう進むかは読者次第である。

入門を謳いながら難解な書籍は世に多いが、本書にその心配はない。数式を一匹残らず駆逐しているわけではないが、式の展開や定理の証明などはない。大学で調査の授業を受けた経験があれば（ナウなヤングは中学3年で標本調査を習うそうだ）、数学が苦手な人でも容易に読み進めることができるだろう。因果関係に興味のある人は、文系理系を問わず、ぜひ本書を手にとっていただきたい。今宵はここまでにいたしとうござりまする。

書評

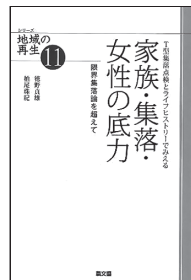
『T型集落点検とライフヒストリーで みえる家族・集落・女性の底力』 ——限界集落論を超えて（シリーズ地域の再生 11）』

●徳野貞雄・柏尾珠紀 著

（農山漁村文化協会，2014年，四六判，348頁，2,808円）

●小内 純子

（札幌学院大学社会情報学部教授）



本書は、徳野担当の「第Ⅰ部 現在の家族と集落をどうとらえるか」と柏尾担当の「第Ⅱ部 地域における女性の力」から構成される。

第Ⅰ部は、「第1章 限界集落論から集落変容論へ」、「第2章『超限集落』における集落の維持・存続」、「第3章 現代農山村分析のパラダイム転換」、「第4章 南西諸島の高出生率にみる生活の充足のあり方」から構成される。九州・沖縄地方を主なフィールドとする実証研究である。

これら4つの論稿を貫くのは、大野晃の限界集落論に対する批判的視点である。徳野によると、限界集落論的アプローチは、統計上固定された空間的な集落を分析単位とするため集落は今後ますます衰退するという結論に陥りやすいという。これに対して徳野の提唱するT型集落点検手法アプローチでは、他出した家族員も含めた「修正拡大家族」やそれらにより構成される「修正拡大集落」という視点が対置される。この視点に立つと、65歳以上層が5割を超える集落でも努力することで「持続可能な限界集落」になり得ると主張する。

徳野の調査研究の最大の特徴は、実践との強い結びつきにある。それは、「将来は不安だが住み続けたいという人びとに、現実的な施策やプランを具体的に提言する」ことが過疎研究者の使命と考えるからである。それだけに豊富な実践から導き出される理論は説得的で、「目から鱗」的な指摘が随所にみられる。ただし、「修正拡大家族」や「修正拡大集落」という概念は、他出家族への過度の期待にも繋がり、「日本型福祉」を連想させる危うさも内包しているように思われる。「赤の他人」によるサポートもやはり不可欠ではないだろうか。

第Ⅱ部は、序章と4つの章（「第1章 農の世界の女性たち」、「第2章 そこにある生産手段を生か

す」、「第3章 地域資源を生かす知恵と技術とネットワーク」、「第4章 女性が創る暮らしのデザイン」）からなる。そこでは柏尾が16年余の近畿地方における調査のなかで出会った農村女性たちの「語り」、すなわち彼女たちのライフヒストリー、ライフストーリーから女性の「底力」を読み解くことがめざされる。

そこで紹介される女性は、土地改良事業を支えた農家のお嫁さん、60歳を超えてから念願だった花づくりを始めた女性、特産品づくりを通じ地域の歴史と農業を次世代に伝える女性、住み分けと気配りで順調に加工グループの世代交代を進める女性、都市の真ん中で仲間と農を楽しむ女性、等々である。これらの事例から女性の「底力」として、「地域社会や身の回りに余計な摩擦が起こらないように配慮しつつ、自分たちが動きやすい状況を作り出していくしなやかながんばり」、「暮らしを豊かにするために周りの資源を生かす創造性」、「戦略的に交渉手段を使い分けるすりぬけ的な調整能力」、「情報を集めネットワークを有効に使い分ける能力」等々が指摘される。

以上の農村女性の暮らしぶりに注目した分析は、これまであまり光が当てられてこなかった農村女性たちの姿を浮き彫りにした点で評価できる。ただし、取り上げられた1人の女性のありようを農村女性一般に当てはまるかのように語る手法には終始違和感を覚えた。また、彼女たちのライフヒストリー、ライフストーリーが十分に掘り下げられていない点に物足りなさを感じる。さらに、「常に摩擦を起こさないように配慮する女性の生き方」を手放しに賞賛することにはもう少し慎重であるべきだと思われる。本稿で捉えた多様な女性のありようをどのように深めていくのか、今後の展開に期待したい。

書評

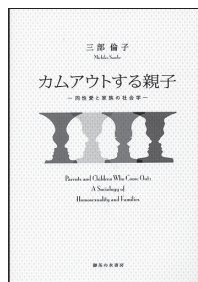
『カムアウトする親子 ——同性愛と家族の社会学』

● 三部倫子 著

(御茶の水書房, 2014 年, A5 判, 276 頁, 3,888 円)

● 鶴田 幸恵

(千葉大学文学部准教授)



日本のセクシュアル・マイノリティ、とくにLGB（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル）のカミングアウトに関する研究は、1990年代に盛んに行われた。そこでの議論は、ゲイの存在を知らしめるものとしてのカミングアウトの政治性についてであった。その後、まとまった研究がみられなかったなかで、本書はカミングアウトに関する研究を家族社会学の領域に広げ、加えてカミングアウトされる親の側に焦点を当てようとする、新たな試みである。

また、セルフヘルプグループとしてのセクシュアル・マイノリティの家族の会は、近年活発に活動しつつあり、その数も増えている。本書が出版されるまでの記録は、活発になるまでの過渡期にあるため、貴重な歴史的資料ともなるだろう。東京から大阪まで足繁く通って行ったインタビューだけでなく、参与観察により会の様子を丹念に記録したその労力の蓄積の結果である本書は、そのようなデータの貴重さという点で高く評価できる。

本書の課題は、LGBの親を日本社会がどのように扱っているのか、生きづらい「問題経験」に親子がどのように向き合っているのかを明らかにすることである。そのために著者は、カミングアウトする側とされる側の相互行為に注目し、それによって親に生じるスティグマを検討する。この、カミングアウトする側／される側のやりとりという相互行為へと着目し、ゴッフマンの「縁者のスティグマ」論を援用してカミングアウトされる親の側に焦点を合わせるの、相互行為論としてもアイデンティティ論としても、非常に興味深い。

他方、それを明らかにするために著者が用いるのが、佐藤郁哉の提唱する「事例—コードマトリックス分析」である。しかし、著者がどのような

コードを用いて分析を進めたのか、本文では必ずしも明白ではなく、著者が立てている問いは佐藤が提唱しているような「なぜ」の問いでもないため、この方法論が分析上どのような役割を果たしているかが読み取りにくい。また、相互行為に着目するとしながらも、ゴッフマンの相互行為論やスティグマ論に一貫して基づいているわけでもない。方法論的には、スティグマに関する考察ですべての章を統一したほうがよかったのではないか。

また、最後の章に出てくる「疑似親子」という概念も、選ばれたデータからは、わかりづらい。これは、あたかも親子関係に見出されるような相互行為という意味の、親子関係のあり方のモチーフとなるような概念として提出されている。しかし、その内実がデータから明らかではないのだ。おそらく、著者の熱心なフィールドワークによって、セルフヘルプグループのなかで「疑似親子」とみなせるような関係性のデータは、多数得られていたのだろう。しかし、提示されるデータとして選ばれたものは、象徴的なものとして読めなかった。

以上のように方法論上の問題点はあるものの、LGBのカミングアウトと家族の関係性に関するそれぞれの章の考察は、非常に面白いものである。今後の研究に期待したい。